

結果構文における推移と境界性の起源 —— 鈴木

結果構文における推移と境界性の起源*

鈴 木 亨

1. は じ め に

Simpson (1983)における英語の「結果構文」の〈発見〉以来、多様なアプローチによる研究が精力的に行われてきたが、いまだにその特性については、広く一致した見解が得られているとはいいがたい。¹

本稿では、結果構文に関する未解決の問題として、(A) 結果構文の成立条件ともいえる境界性制約 (boundedness constraint) の本質は何か、(B) 結果構文はなぜ完全に生産的ではないのか、という2点を重点的にとりあげ、結果構文の成立条件には、BECOME事象に対応する「測定尺度 (scale) /経路 (path)」が解釈上構築されることが不可欠に関わっているという立場から、一定の解答を提案する。さらに関連して、make使役構文との比較から、結果構文の構文としての自律性について考察し、結果構文が他のより生産的な構文 (例えばWay構文) に比べ、なぜ半生産的 (semi-productive) にしか使用されないのか、言い換えると、なぜ慣用的な固定性が強いのかという点についても、構文の成立条件に基づく説明を試みる。

2節では、上記の第1点、「(A) 結果構文における境界性の制約」についての先行研究を概観する。3節では、結果句の境界性に関する一般化を提示し、それに基づく結果構文の成立条件として、変件事象の推移が生じる「測定尺度/経路」の解釈について議論する。さらに、「測定尺度/経路」上に位置づけられる境界 (boundary) の読みは、複合述語形成 (complex predicate formation) に伴い概念上要請される副次的な効果であると論じる。4節では、make使役構文との比較から、上記の第2点、「(B) 結果構文の使用における半生産性」について考察する。5節が全体のまとめとなる。

2. 結果構文における境界性の問題

結果構文における結果句としては、主に形容詞と前置詞句が生じるが、ここではまず形容詞

*本稿をまとめるにあたり、同僚のTodd Enslen, Mark Irwin, Steve Ryanの各氏にインフォーマントとしてご協力いただいたことをここに記し、感謝したい。

¹結果構文研究の現状と課題についての、比較的バランスのとれたまとめとしてNapoli (1999)がある。周辺の構文までを視野に入れた記述的な総論として、Goldberg and Jackendoff (2004)が有益である。また、Boas (2003)は、使用基盤モデル (Langacker (1991, 2000)) の立場から従来の主要な結果構文分析を批判的に検討している。

タイプに限定して考察を進めていく（前置詞句タイプについては、3節でとりあげる）。結果句として容認される形容詞は、動詞が表す行為/活動の内容からある程度予想のつく、自然な帰結を表すものが一般的であるとされるが（Washio (1997) 参照）、実際には、現実世界においては考えうるような結果状態であっても許されない場合もあり、より厳しく限定されていることが従来から指摘されている。²

- (1) a. John hammered the metal flat/smooth/(?)shiny/*beautiful/*safe. (Wechsler 1997:309)
- b. He wiped the table clean/dry/*wet/*dirty.
- c.*He drank himself funny/happy.
- d.*The bear growled us afraid. (Goldberg 1995)
- e.*Dean laughed himself {happy/sleepy}. (Jackendoff 1997:552)

このような結果句の種類の限定性に関して、Goldberg (1995) や Vanden Wyngaerd (2001) は、結果構文における結果句は、境界性 (boundedness) を持たなければならないと論じている。Goldberg (1995:195) によれば、結果句となりうる形容詞の大半は、(2) のような、測定尺度 (scale) 上で明白に限定された上限のある、典型的に非段階的 (nongradable) な形容詞であり、また、フェイク目的語結果構文（非選択的結果構文）に生じる形容詞は、(3) のような一見すると非段階的ではないものが含まれるが、(4) の例からも明らかのように、結果構文という文脈においては、境界性を持つ解釈が要請されることは、Vanden Wyngaerd (2001) によっても指摘されている。

- (2) ?a little {sober, flat/smooth, alive/dead, asleep/awake, full/empty, free}
 - (3) a little {sick, hoarse}
 - (4) a. ?He talked himself a little hoarse.
 - b. ?she ate herself a little sick. (Goldberg 1995:196)
 - c. Tim danced himself {completely/almost/half/*very} tired.
 - d. Max shouted himself {completely/almost/half/*very} hoarse.
 - e. The joggers ran the pavement {completely/almost/half/*very} thin.
 - f. Charley laughed himself {completely/almost/half/*very} silly.
- (Vanden Wyngaerd 2001:64)

結果構文における結果句の選択において、なんらかの形で上記のような境界性の制約が働いていることはたしかだと思われるが、なぜそのような制約が存在するのかという点については、従来の研究では適切な説明が与えられているとはいえない。Goldberg (1995) では、単に

² なお、結果構文の大まかな分類として、目的語が動詞によって意味的に選択されている事例と選択されていない事例について、本稿では、それぞれ「選択的結果構文 (selected resultatives)」と「非選択的結果構文 (unselected resultatives)」と呼んで区別する。ここで詳細を論じることはいらないが、Wechsler (1997, 2001) における「コントロール結果構文」と「ECM結果構文」、さらに Washio (1997) における「弱い結果構文 (weak resultatives)」と「強い結果構文 (strong resultatives)」の区別を参照。

構文に付随する意味制約の1つとして述べられているのみであり、またVanden Wyngaerd (2001:89)においても、結果句は、「動詞が表す構造化されていない活動の総体から一定量を取り出す計量カップのようなものとして機能する (functioning as a sort of measuring cup allowing one to take a specified quantity of an unstructured mass of verbal activity)」という直感的な比喩以上の説明は与えられていない。

結果構文における境界性の制約を、もう少し別な角度から捉えようとする分析としては、Wechsler (2001)における「同型性 (homomorphism)」やRappaport Hovav & Levin (2001)の「時間的依存性 (temporal dependence)」という概念に基づく提案がある。いずれも、結果構文において、動詞が表す上位事象としての活動が、形容詞の表す下位事象としての特定の結果への変化と同期することを論じている。簡単にいえば、活動事象の時間的進行が、結果事象(目的語に生じる変化)と並行的に展開していくという解釈が要請されるということである。³

(5) Wechsler's (2001:6) 'homomorphism':

Some property of the affected theme argument changes by degrees along a scale due to the action described by the verb, until it reaches a bound.

1. The telic event and the path must be (a) *homomorphic* (parts of the event must correspond to parts of the path and vice versa) and (b) *coextensive* (the event must begin when the affected theme is at the start of the path and end when the affected theme reaches the end of the path).

2. The affected theme must be an argument of the event-denoting predicate.

(6) Rappaport Hovav & Levin's (2001:775) 'temporal dependence':

"...the time course of the subevent introduced by the result XP mirrors the time course of the event denoted by the verb and, thus depends on the nature of the event denoted by the verb".

これらの「同型性」、あるいは「時間的依存性」が厳密にすべての結果構文において成り立つわけではないことは、WechslerおよびRappaport Hovav & Levinが指摘するとおりである。これらの制約は、基本的には選択的結果構文においてのみ成立するものと思われる。ただし、Rappaport Hovav & Levinは、選択的結果構文においても、継続的に力を行使する動詞 (verbs of exerting force) 以外では、必ずしも「時間的依存性」が成立しないと述べている。⁴

(7) a. We all pulled the crate out of the water.

³Wechslerの「同型性」とRappaport Hovav & Levinの「時間的依存性」の概念は、いずれもKrifka (1992, 1998)の先行研究に基づいている。また関連する事象分析としては、Jackendoff (1996)も参照。KrifkaとJackendoffの研究は、Dowty (1979, 1991)における「漸次変化主題 (incremental theme)」のより一般的な形式化を意図している。

⁴Rappaport Hovav & Levin (2001)は、「時間的依存性」の解釈は事象構造における単純事象にのみ適用し、複合的使役事象には当てはまらないと論じている。

- b. They yanked the nails out of the board.
 - c. The coast guard tugged the raft back to shore.
- (8) a. Clara rocked the baby to sleep.
- b. The police shot the robber to death.
 - c. The critics panned the play right out of town.

(Rappaport Hovav & Levin 2001:793)

(7)の各例では、動詞の表す行為 (pulling, yanking, tugging) に伴って、目的語が移動し、それぞれの行為と移動が時間的な終結点において一致するのに対し、(8)の各例では、目的語の変化の以前に動詞の行為 (rocking, shooting, panning) が完了している解釈が一般的であるとされる。例えば、(8c)では、「批評家が演劇を酷評する」という事象と「演劇 (劇団) が街を出ていく」という事象のあいだには、明らかに時差があると指摘されている。これは、ちょうど次のようなフェイク目的語結果構文と並行的な解釈であると、Rappaport Hovav & Levin は考えている。

- (9) He sang herself hoarse.

この例では、(10)に示されるように、「歌う行為」自体と「歌い手の声がかれる」という事象にはいくばくかの時間差があると考えるのが現実的な解釈であろう。

- (10) Sam sang enthusiastically during the class play. He woke up the next day and said, 'Well, I guess I've sung myself hoarse.' (Rappaport Hovav & Levin 2001:775)

しかし、Rothstein (2004:135)は、(11)のように、あえて時間差を言語化しようとするとは不自然な解釈になる例を挙げ、Rappaport Hovav & Levinが観察した行為事象と結果事象のあいだの時間差は、現実世界のあり方を直接反映した見かけ上のものにすぎず、文法的な意味解釈のシステムにおいては、時間差は存在しない、したがってフェイク目的語結果構文の例においても、選択的結果構文と同様に、行為事象と結果事象のあいだには時間解釈上の区別を設ける必要はないと論じている。この点については、のちの議論で再度とりあげることにする。

- (11) a. (#) I sung the baby asleep, but when I stopped singing she was still awake.
 b. (#) We clapped the singer off the stage, although when we stopped clapping she was still on the stage. (Rothstein 2004:135)

結果構文の境界性の制約に関連するもう1つの提案としては、結果構文がそのアスペクト特性として達成事象 (accomplishment) として解釈されるという考えに基づくものである。これは主に事象構造モデルを設定する立場から、達成の事象構造が自動的に完結性 (telicity) の解釈をもたらすことになり、例えば、Rappaport Hovav & Levin (1998) の意味の鋳型 (semantic template) のアスペクト解釈では、定義上、達成事象は常に完結的な解釈を持つことになるので、そこに生じる結果句は、必然的に「変化/移動」の境界を表す解釈を持つもので

なければならないということになる。

(12) Semantic Template (Rappaport Hovav & Levin 1998)

[x ACT<MANNER> (y)]	(activity)
[x <STATE>]	(state)
[BECOME [x <STATE>]]	(achievement)
[[x ACT<MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]	(accomplishment)
[x CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]	(accomplishment)

しかしながら、いわゆる結果構文が、常に完結的な解釈を持つとは限らないことが、すでにいくつかの先行研究で指摘されている。⁵

まず第一に、フェイク目的語結果構文が、強調用法で誇張的に解釈される場合には、通常非完結的 (atelic) なアスペクト解釈となるのが自然である。

(13) a. Sue worked her butt off for/*in an hour.

b. The frog sang his heart out for the whole night/*in a night. (Jackendoff 1997:551)

また、主に使役的移動を表す結果構文においても、非選択的目的語が生じる場合には、必ずしも完結的な解釈が要請されるわけではない。

(14) a. Jeff washed soap out of his eyes for ten minutes. (Vanden Wyngaerd 2001:82)

b. John waltzed Matilda around and around the room for hours.

c. John walked Mary along the river all afternoon.

d. John ran the dog up and down the path for hours.

e. John jumped the horse back and forth across the ditch for 30 minutes.

(b-e: Harley & Folli 2004:8)

さらに、結果構文は「動作主が被動作主に働きかけて変化/移動を生じさせる」という使役的解釈を持つと一般に考えられているが、使役構文の典型ともいえる動詞makeを用いた使役構文では、結果構文に見られる境界性の制約が見られない。

(15) a. The rain made the balcony a little wet.

b. He made the pizza a little warm.

c. She made him {a little/very} happy.

d. His talk always makes me {a little/very} sleepy.

したがって、アスペクト分類に基づく使役的達成事象が結果句の境界性を要請するという説明は、不十分であると考えられる。以下では、結果句の選択に課される境界性の制約と結果構文自体の半生産性に関して、「測定尺度/経路」の構築可能性という観点から一定の説明を与えるを試みる。

⁵ Jackendoff (1997), Vanden Wyngaerd (2001), Harley & Folli (2004)を参照。構文の使役解釈とアスペクトの完結性には必ずしも対応関係が成立しないことについては、Levin (2000)が詳しく論じている。

3. 測定尺度/経路上の推移と結果句の境界性

この節では、結果構文の成立には、「測定尺度 (scale) / 経路 (path)」の構築が本質的にかかわっていることを提案する。以下では、(A) 選択的結果構文における形容詞結果句が「相補的対立」という概念に基づく測定尺度上の推移を表していること、(B) 非選択的結果構文や前置詞句結果構文の場合も並行的に、測定尺度上の推移という意味解釈が成立すること、(C) 結果構文の成立において中核的な役割を果たす境界性の読みは、複合述語形成に伴って概念上要請される派生的な解釈であることを論じる。

3. 1 結果構文における相補的対立

結果句として認可される形容詞は、従来の研究でも変化を表す「測定尺度 (scale)」上の上限を指示する境界性 (bounded) の解釈を持ちうるものであることが指摘されている (Goldberg (1995), Wechsler (2001), Vanden Wyngaerd (2001))。しかし詳しく見ると、選択的結果構文に生じる形容詞と非選択的結果構文に生じる形容詞では、どちらも結果構文の文脈においては、境界的解釈を受けるが、それぞれの形容詞の内在的意味に着目すると、結果構文のタイプに応じて大まかに二分することができる。つまり、選択的結果構文に現れる形容詞は、相補的対立語 (complementary opposites) における上限を表す閉鎖的 (closed-scale) 形容詞 (= 非段階的 (nongradable) 形容詞) であるのに対して、非選択的結果構文に現れる形容詞は、本来的には段階的な形容詞で、かつ人間を含む対象物の内在的機能が損なわれた状態を表すものが多い。

まず、選択的結果構文における相補的対立語について見てみよう。Cruse (1976, 2000), Gnutzmann (1975)らの知見にしたがうと、英語の形容詞におけるいわゆる反意語のペアは、対立関係の違いに基づいて次の3通りに分類できる。⁶

- (16) 相補的対立語 (complementary opposites) : {dry/wet, sober/drunk, smooth/rough, straight/bent, dead/alive, safe/dangerous, etc.}

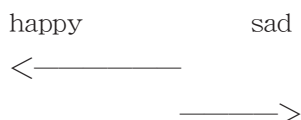
clean dirty
 <+—————> (+は測定尺度上の境界 (上限) を示す)

- (17) 記述的反意語 (descriptive antonyms) : {deep/shallow, long/short, fast/slow, wide/narrow, heavy/light, large/small, thick/thin, etc.}

deep shallow
 <=====> (==は測定尺度上の中間領域を示す)

⁶ 段階性の測定尺度に基づく反意語の分類に関する、より詳しい動機づけについては、Cruse (1976, 2000), Gnutzmann (1975), Sapir (1944)を参照。「相補的対立語」という用語は、Cruse (2000), 「記述的反意語」と「評価的反意語」という用語は、Gnutzmann (1975)によるが、それぞれの分類基準や具体的事例については、本稿執筆者の解釈と判断に基づく修正が含まれている。

- (18) 評価的反意語 (evaluative antonyms) : {good/bad, happy/sad, beautiful/ugly, kind/cruel, clever/dull, polite/rude, intelligent/stupid, etc.}



(16) の示す「相補的対立語」のペアは、連続的な測定尺度上の両極に位置づけられ、それぞれの指示範囲が測定尺度全体を相補的に網羅することになる。つまり、「AでなければB、BでなければA」という相補的關係が成立し (The table is *dry*. → The table is not *wet*.), どちらでもないという中間領域を残さないということになる。通例、一方が非段階的な境界 (起こりうる変化の上限) を指し、もう一方が上限のない段階的な形容詞として測定尺度の残り全体を含む。なお、empty/fullのペアに関しては、どちらでもない中間領域が存在するが (The bath tub is neither *empty* nor *full*.), 両者とも潜在的な変化の上限を示すという点で、次の記述的反意語とは異なる。また、open/shutのペアにおけるopenは、文脈 (ドアや窓の形態等) によって中間領域と上限の解釈には幅がありうるが、やはりempty/fullのペアと同様に、どちらも潜在的な変化の上限を指す場合が一般的と考え、相補的対立語の分類に含める。関連して、dead/aliveのペアはどちらも指示範囲が点的な上限で、変化が生じうる実質的な測定尺度の存在は自明ではないが、half deadやhalf aliveのような表現があることを考えると、それぞれの上限に至る測定尺度を想定する動機づけが存在すると思われる。

(17) の「記述的反意語」のペアは、同一の測定尺度上の両極として位置づけられるが、当該の測定尺度上にどちらにも属さない中間領域を含む。したがって概念的には1本の測定尺度上で対立するAとBだが、AでもBでもない中間段階の状態がありうる。このタイプは、客観的な数値に基づいて記述される対立概念を表すものが多い (The river is neither *deep* nor *shallow*, but inbetween.).

なお関連して、Washio (1997) で議論されている「擬似結果句 (spurious resultatives)」は、このグループと基本的な対応関係があるように思われる。Washioによると、外見上は結果句に似ているが、実際には動詞句に対する副詞的修飾語として機能する擬似結果句とでもいうべきものがある。

- (19) a. He tied his shoelaces tight/loose.

- b. He cut the meat thin/thick.

(Washio 1997: 16-17)

Washioが挙げているこれらの擬似結果句の特徴は、(A) 形容詞が特定しているのが、結果状態なのか動詞行為の様態なのかあいまいであり、(B) 基本的な意味を変えずに -ly 形の副詞との置き換えが可能、また (C) 反意語のペアを構成する形容詞が存在し、両者ともに結果句的に使用できる、などである。これらの結果句は、一般に形容詞が同型で副詞として用

いられる副詞的用法 (flat adverb) として分類されるものと主要なメンバーが重なっている (e.g., long/short, slow/fast, tight/loose, thin/thick)。記述的反意語の形容詞であることと、副詞的用法があることの背後にある相関関係については、現段階では十分な説明はできないが、ここでは Washio にしたがって、このタイプの形容詞が結果構文で用いられている場合には、副詞的修飾語として機能している可能性があることを示唆するにとどめておく。⁷

最後に、(18)の「評価的反意語」のペアは、一見概念上対立しているように思われるが、正確には同一の測定尺度上に起こりうる変化の状態として両者を位置づけることはできず、それぞれが独立した測定尺度上で段階的な状態を示す。記述的反意語と似ているが、Aの否定が必ずしもBの肯定につながらないだけでなく、その中間領域を測定尺度上に特定することが一般に困難である (He is not happy \nrightarrow He is sad.)。このタイプの形容詞は、客観的な計測が困難な人や物の内在的な性質を表すものが多い。

以上の三分類のうち、相補的対立語のペアにおいて測定尺度上の上限を示す非段階的形容詞が、選択的結果構文に生じることが可能な形容詞にほぼ相当する。言い換えれば、選択的結果構文においては、上限を持つ測定尺度が解釈上唯一的に構築できることが、結果句の選択条件となっている。そして、結果構文において成立するこのような独自の変化事象の解釈を、以下では「唯一的な測定尺度上の推移」と呼ぶことにする。

3. 2 非選択的結果構文における機能不全 (dysfunction) の解釈

次に、非選択的結果構文では、結果句として生じる形容詞の種類が相補的対立語よりも若干の広がりを見せる。特にフェイク再帰形目的語の事例を観察すると、基本的には身体等の正常な機能が損なわれた状態を表す形容詞が多いことに気づく。

- (20) a. She sang herself hoarse.
 b. He danced himself tired.
 c. He danced his feet sore.
 d. We laughed ourselves sick/silly.

これらの形容詞には通常の意味での反意語は存在しないが、否定接尾辞 *un-* をつけて対応する否定概念を表すこともできないという特徴がある。

- (21) *unhoarse, *untired, *unsick, *unsore, *unstiff, *unthreadbare, *unsilly, *unsenseless
 ここでは、これらの形容詞を「機能不全 (dysfunction) の形容詞」としてまとめて考えて

⁷ 一部の結果句が、副詞的修飾語として考えられるという分析は、Rapoport (1999) にも見られる。Rapoport は、活動事象から達成事象へのアスペクト変化の有無を基準として、本来的に達成事象である動詞句に加えられた結果句を、動詞の内在的結果を修飾する副詞的修飾語であると分析している (e.g., She broke the vase into pieces.)。それにしたがうと、例えば She painted the wall black. における色彩語形容詞も真の結果句ではないことになる。本稿の分析でも、選択的結果構文における色彩語形容詞は、原則として相補的対立をなさないで例外的な扱いとなるが、擬似的結果句 (副詞的修飾語) と分析することも考えられる。

みよう。機能不全の形容詞に共通する反対概念は、身体機能等の正常な状態である。つまり、これらの形容詞が生じる結果構文で表される推移は、基本的に目的語に関する正常な状態 (normalcy) から、否定的な方向に逸脱して、機能不全に至る変化であるといえる。⁸ この推移は、(22)のように図示することができる。



これらの結果構文の解釈においては、相補的対立語の場合と並行的に、擬似的な測定尺度が構築されていると考えられる。その場合、一方の極限として、事物の正常な状態という、直接語彙的に対応する表現の存在しない起点を想定していることになる。「機能不全」という特定の意味タイプを持つことで、これらの形容詞は、推移における測定尺度上の潜在的な起点を特定することができるのである。

正常な状態を変化の起点として設定する根拠として、結果構文でこれらの形容詞が使用される場合に、halfによる修飾が可能であることが挙げられる。(23)の各例において、halfによる修飾は、当該の形容詞が示す変化が一定の測定尺度上の推移であり、それが上限までは至っていないこと、すなわち特定の測定尺度の存在そのものを示唆する証拠と考えられる。⁹

- (23) a. Tim danced himself half tired.
b. Max shouted himself half hoarse.
c. Charley laughed himself half silly. (Vanden Wyngaerd 2001:64)

意味的にはある種の否定的な方向づけを持つと考えられる形容詞でも、評価的反意語に属する形容詞はこれらのフェイク目的語結果構文でも許されない。

- (24) a. *The audience laughed the actor stupid.
b. *She cried herself sad.

これは、前節で見たように、これらの形容詞には一般に反対概念となる起点を設定することができないからである。つまり、起点となりうる極限を持つ唯一的な測定尺度を想定できないということである。(24)の例では、愚かさ (stupidity) や悲しさ (sadness) の測定尺度に関する正常値が存在しないことが示唆される。フェイク目的語結果構文に生じる機能不全の形容詞は、(25)のように、それ以外の文脈においても、halfによる修飾が可能だが、評価的反意語の形容詞は、(26)のように、一般にhalfによる修飾は不可能であり、この対比は、機能不全の形容詞には内在的な測定尺度を想定できることを示唆している。

- (25) a. David Wells was half-sober when he pitched his perfect game.
b. His voice was half-hoarse from all the begging.
c. Get on your bike and cycle until you're half tired.

⁸機能不全解釈は、Jackendoff (1997)における過剰な行為 (excessive activity) という特徴づけに対応する。

⁹ 関連する測定尺度に関する研究として Kennedy & McNally (to appear) を参照。

(26) ?/*half stupid, *half rude, *half ugly, (?) half sad¹⁰

また、機能不全解釈の結果構文においても、形容詞本来の段階的性質にかかわらず、上限に達する境界的な解釈が要請されていることは、それらの結果構文の例において結果句へのveryによる程度修飾が不自然であることから示される。

(27) a. *Tim danced himself very tired.

b. *Max shouted himself very hoarse.

c. *Charley laughed himself very silly. (Vanden Wyngaerd 2001:64)

一方、再帰形目的語以外のいわゆるフェイク目的語が生じる非選択的結果構文の事例では、相補的対立の形容詞も多く観察される。

(28) a. They drank the teapot dry.

b. Drive your engine clean.

c. The dog barked me awake.

d. Don't expect to swim/jog yourself sober. (Levin & Rappaport Hovav 1995:187)

以上の観察から選択的結果構文においては、相補的対立における上限（＝境界）となりうる形容詞のみが結果句として認可されるのに対して、非選択的結果構文では、さらに「機能不全」の解釈を持つ形容詞までが結果句の選択肢として容認されているという記述的一般化が成り立つ。

なお、形容詞の機能不全解釈は、再帰形目的語の非選択的結果構文に限られるわけではなく、目的語に関して一般的に本来的な機能が損なわれた状態という解釈が成立する場合には、通常の名詞句を用いた非選択的結果構文でも可能である。

(29) a. She cried her handkerchief wet.

b. The joggers ran the pavement thin.

これらの形容詞は、本来的には段階性を持つ形容詞であり、上限を設定できないという意味で境界的ではないが、(29a)では、handkerchiefが正常に機能する状態がnot wet (=dry)であること、(29b)では、pavementの正常な状態はnot thinであることと考えれば、語用論的情報が介入した上で、機能不全の解釈が成立しているといえることができる。

以上をまとめると、形容詞が生じる結果構文においては、選択的結果構文であるか非選択的結果構文であるかにかかわらず、変化の生じる特定の測定尺度上において上限（境界）が設定できるような解釈が、結果句の選択に関与していることがわかった。つまり、唯一的な測定尺度上の上限（境界）への推移の解釈が、結果構文を認可している。そのような測定尺度は、相補的対立語において、もっとも明白に想定でき、それが選択的結果構文の形成に対応している。さらに、明示的な対立語彙が存在しないにもかかわらず、推移における潜在的な測定尺度の起点を、事物が正常な機能を果たす状態として想定できる機能不全の形容詞類が、選択肢として

¹⁰インフォーマントによると‘half sad’は、He felt half happy and half sad.のように対句として用いる場合のみ容認性が高くなるようである。

加わったものが、非選択的結果構文（いわゆるフェイク目的語結果構文）ということになる。したがって、形容詞結果構文に関して以下の一般化が成り立つ。

(30) 形容詞結果構文においては、相対する概念を基準（起点）とした唯一的な測定尺度上の上限（境界）への推移という解釈が成立しなければならない。

次節ではさらに、前置詞句が生じる結果構文においても、形容詞の場合と同様の一般化の下で、結果句の選択が特徴づけられることを論じる。

3. 3 前置詞句結果句における境界

通常、結果構文で許される前置詞句の主要部は、動的な経路解釈を持つ前置詞に限定される。これらの前置詞は、補部となる名詞句の外郭を移動の境界として、外部から特定領域への移動（＝進入ingression）、あるいは、特定領域から外部への移動（＝離脱egression）を表す。

(31) a. ingression (e.g., to, into)

————→/===== （=====は、名詞句によって特定される領域を示す）

b. egression (e.g., out of, off, away from)

===== /————→

ここにおける移動概念は、抽象的にも解釈可能であり、意味的に状態変化を表すようなto deathやto sleepなどの例では、名詞の表す抽象的な場所（＝状態）への移動/変化と考えることができる。結果構文における前置詞句は、移動の経路が任意の境界を横断する（少なくとも境界に到達する）という解釈を持つことになるが、前節で見た形容詞を含む結果構文において、唯一的な測定尺度上の上限への変化という解釈が想定できるかどうか、形容詞の種類の選択を規定していたのと並行的に、前置詞句を含む結果構文における変化は、形容詞の場合の測定尺度上の変化を、空間的な経路上の変化（移動）として読み替えたものと特徴づけることができる。

測定尺度それ自体は明示されない形容詞の場合と異なり、前置詞句の場合は、境界（上限）、および境界に向かう移動の経路が、具体的な名詞句と前置詞によって明示されるという違いがあり、まさにその点が、前置詞句結果句が一般に動詞の種類を選ばずに多用されるという事実反映されている。これは、結果構文におけるいわゆる新奇な用法とされる例には前置詞句結果句を伴うものが比較的多いこと、さらに、比喩的な誇張用法において、to deathやto sleepなどのある程度定型化された結果句が、移動の意味を本来は含まない多様な動詞とともに用いられることとも関連している。

(32) a. Frank sneezed the tissue off the table.

b. Elena coughed the foam off the cappuccino. (Rappaport Hovav & Levin 1999:20)

c. John laughed tomato soup up his nose. (Verspoor 1997: 115)

d. Ralph tried to blink the grisly vision away. (Stephen King, *Insomnia*)

e. Messenger kissed these questions from her lips.

(David Lodge, *Thinks...*)

(33) a. I cried myself to sleep for years. (David Lodge, *Therapy*)

b. Sudsy cooked them all into a premature death with her wild food.

(Rappaport Hovav & Levin 2000)

一方、移動の含意のない静的な前置詞を主要部とする前置詞句が、いわゆる結果構文の解釈では許されないという事実は、結果構文の成立において要請されるのが、移動の着点のみならず、経路そのものの解釈であるということを示している ((34)は、いずれも結果構文としての解釈での判断である)。

(34) a. *He blew his handkerchief on the floor.

(cf. He blew his handkerchief onto the floor.)

b. *He shoved her in the room.

(cf. He shove her into the room.)

形容詞結果句を中心とした状態変化の結果構文では、変化は、相対する概念を基準（起点）とした唯一的な測定尺度上における上限への推移が要請されたが、前置詞句結果句で、特に位置変化を表す結果構文では、名詞句補部が特定する領域が唯一的な経路を定める基準として機能している。すなわち、位置変化における経路は、名詞句が移動における境界を明示的に提供することによって特定されることになる。

以上の議論に基づき、結果構文における結果句の選択にかかわる条件を一般化すると、結果句の範疇（形容詞か前置詞句か）、および変化の様相（状態変化か位置変化か）にかかわらず、潜在的な起点を特定できるような唯一的な測定尺度（経路）上における上限（境界）への推移（到達、あるいは横断）が想定できるような形容詞、あるいは前置詞句のみが、結果句として機能するということになる。これを、結果構文の解釈における一般化として、以下のようにまとめて提案する。

(35) 結果構文の解釈における一般化

結果構文においては、唯一的な測定尺度（経路）上における上限（境界）への推移が解釈上成立しなければならない。

(A) 状態変化を表す結果構文においては、唯一的な測定尺度上における上限への推移

(B) 位置変化を表す結果構文においては、唯一的な経路上における境界への推移

3. 4 境界性の起源としての複合述語形成

(35)の一般化に基づいて、以下では、そもそもなぜ結果構文においては、結果句の範疇タイ

ブにかかわらず、境界的な解釈が要請されるのかという点をさらに掘り下げて考察したい。

英語における形容詞は本来、それ自体では非時間的 (atemporal) である。言い換えると、時制との直接的な関係を持つことができない、すなわち、時間軸上に成立する事象としては直接的に解釈されるものではない。にもかかわらず、形容詞は、結果構文の文脈においてのみ「変化に伴う結果状態」という時間軸上に固定された解釈を持つのはなぜだろうか。他の文脈、例えば、知覚動詞補部、ECM動詞補部、描写 (depictive) 構文、with構文などでは、形容詞に変化プロセスの解釈はなく、単なる状態解釈のみが可能である。

本稿では、結果構文における結果句の境界的解釈の起源を、動詞と形容詞による「複合述語形成 (complex predicate formation)」の反映として捉えることを提案したい。結果構文において、動詞と結果句述語が、何らかの意味で複合的な述語を形成することは、多くの研究において、暗黙の前提とされている。例えば、Rappaport Hovav & Levin (2001)やWechsler (2001)の事象構造に基づくアプローチにおいては、技術的な詳細は別にして、2つの下位事象が解釈上関連づけられる分析が提案されているが、これはつまり2つの述語が合成的な解釈を受けるということである。Verspoor (1997)も、異なる理論的枠組みでの述語合成操作を仮定している。

しかし、従来の研究で十分に考慮されていないのは、なぜ本来非時間的な形容詞が、複合述語形成の下で、概念的にはBECOME述語に対応するような変化事象を表すことができるのかという点である。つまり、従来の研究では、結果句に対応して、BECOME事象を含む変化事象があらかじめあるものとして仮定されているのである。¹¹ まず、複合述語形成に先立つ構造上の必要条件として、動詞の補部に、名詞句と形容詞等の二次述語からなる小節 (small clause) が埋め込まれた構造を仮定する。動詞と二次述語は、このような局所的構造に基づいて、合成的な解釈が可能になると考える。

(36) NP V [SC NP XP]

紙幅の都合で詳述は割愛するが、このような、直接目的語制約(Direct Object Restriction; Simpson (1983), Levin Rappaport Hovav (1995))と呼応する構造条件が、複合述語形成に必須の条件であると考えることにより、結果構文における動能交替 (conative alternation) の不可能性 (*He kicked at the gate open.; Simpson (1983) 参照)や、再帰形目的語の必要性、ロマンス系諸言語における形容詞結果構文の不可能性 (Washio (1997), Napoli (1999) 参照)などに対して、より直接的な説明が可能になると考えられる。

次に問題になるのが、本来非時間的な解釈特性を持つ形容詞が、時間軸上に展開する解釈を内在化している動詞とどのように関係づけられるかということである。

¹¹事象構造に基づく研究では、事象構造の基本レパートリー (例えば、Levin & Rappaport Hovav (1995)における「意味構造の鋳型 (semantic template)」) が仮定されており、それに基づいた変化事象解釈がなされているが、非時間的な形容詞がそのような事象構造に組み込まれた場合の解釈のしくみが明示的に説明されているわけではない。

時間軸上での形容詞の解釈可能性は概念上二通りありうると考えられる。1つは、形容詞の表す状態が汎時間的に拡張される解釈で、この場合は、動詞の表す事象の展開と形容詞の表す状態の成立が時間軸上で完全に重複することになる。これは動詞が活動動詞であれば、描写構文の解釈、状態動詞であれば、知覚構文やECM構文の解釈に対応することになる。もう1つの可能性は、本来時間的な限定のない形容詞が表す状態の成立を、あえて時間軸上の一点に固定する解釈であり、これが結果構文に対応する。特定の時点にある状態が成立するということは、必然的にそれ以前の状態と当該の状態とを区別する変化の「境界(boundary)」を画定することが要請される。つまり、特定の時点に当該の状態が成立するためには、さかのぼってそこに至る「変化」の事象の存在が含意される。

「境界」を設定できる形容詞は、第一に、相補的対立における上限として、唯一的な測定尺度上の推移を構築できる形容詞、第二に、相補的対立ではないが、内在的な基準点（正常値）が想定され、いわば擬似的に相補的対立の測定尺度上の推移を構築できる機能不全解釈の形容詞ということになる。つまり、結果構文の解釈において必須である変化事象の読みは、複合述語形成の際に、内在的に時制を指向する動詞と、本来的に非時間的な形容詞という本来相容れない解釈特性を持つ2種類の述語が、同一の時間軸上で統合される際に概念上許される選択肢の1つとして、形容詞が表す状態を時間軸上に固定するために要請される「境界」の解釈から派生的に生じるものといえる。形容詞は、状態の成立時点を時間軸上に固定されることによって、動詞との整合的な解釈を獲得するのである。¹²

ここまでの議論をまとめると、動詞の補部に小節が埋め込まれた構造をもとに、複合述語が形成され、時間軸上に展開する活動事象に、本来非時間的である形容詞が関連づけられる際の概念上の解釈の方策として、状態の成立時点を特定する「境界」が導入され、それに伴い派生的に変化事象の読みが生じるという解釈プロセスを論じた。つまり、本来的に時間的指向を持たない述語である形容詞が、動的な活動事象に組み込まれるには、境界概念を導入することが解釈上要請されるということになる。

結果構文の境界性解釈の起源が、構造的に規定された複合述語形成において概念上異質な述語間の齟齬を解消することから生じるという考えは、結果（変化）事象の成立を自明のものとする従来の事象合成分析とは異なり、特定の構造に動機づけられて、形容詞がある種の「強制(coercion)」を受けた結果、時間軸上に「境界」が導入され、派生的に変化事象の解釈が得られるということを主張している。この点については、従来の構文文法や事象構造アプローチとは異なる理論的志向性を持つことになると思われるが、さらに検討を要する問題なので、機会を改めて論じることとしたい。

ここまでは、形容詞結果句に関して複合述語形成において境界性の読みが導入されることを

¹²もう1つの選択肢、すなわち時間軸上に全幅の広がりを持つ描写構文に対応する解釈は、いわばデフォルトに得られる解釈であり、複合述語形成を必ずしも前提としないとする可能性も考えられる。

論じてきたが、移動/変化の経路が明示される前置詞句の場合にも、複合述語形成が起こると考えるべきだろうか。前置詞句結果句が、結果構文において形容詞結果句と同等の機能を果たすことは、アスペクトの変更やフェイク目的語の認可などの現象からも明らかである (Napoli (1999)参照)。また、中間構文の形成においても、通常中間構文では認可されない動詞が、前置詞句結果句を伴うことによって容認されるようになる事例が、Rapoport (1993:175-176)で提示されている。

- (37) a. *This kind of metal hammers fast.
 b. *This counter wipes quickly.
 c. *This room sponges easily.
 d. *Elephants do not knock easily.
- (38) a. This kind of metal hammers smooth fast.
 b. This counter wipes dry quickly.
 c. This room sponges clean easily.
 d. Elephants do not knock unconscious easily.
- (39) a. This nail hammers into the wall fast.
 b. This kind of oil rubs into the wood easily.
 c. This dough pounds into a sheet easily.
 d. These grapes crush to a pulp easily.

中間構文の成立プロセスに複合述語形成がどのようにかわるのかは自明ではないが、上記の例では少なくとも形容詞結果句と前置詞句結果句が、同等の資格でかわっていることはたしかであると思われる。したがって、暫定的ではあるが、ここでは前置詞句結果句も、一部の副詞的解釈を持つものを除いては (Napoli (1999), およびRapoport (1999)参照), 形容詞結果句と並行的に複合述語形成を受けるものと考えことにする。

最後に、2節においてすでに触れたRappaport Hovav & Levin (2001)が主張する下位事象間の時間的依存性について、再度検討しておきたい。彼らによれば、時間的依存が成り立たない、すなわち、同期性がなく、時間差が存在するとされるフェイク目的語結果構文の例に関しては、すでに2節において、Rothstein (2004)の議論にしたがい、依存関係は現実の時間関係を忠実に写すのではなく、むしろ直接的使役関係を捉えるものと考えれば、必ずしも例外的に扱う必要はないのではないかと述べた。たしかに、He sang himself hoarse. のような例において、「声がかかる」という変化事象は、「彼が歌う」という活動事象と同期はしていないが、活動事象の終結と結果状態の成立は、事象の連鎖という抽象レベルでは、あいだに何も介入することのない直接的関係と見なすことができる。

本稿では、結果構文では、複合述語形成によって、時間軸上で2つの事象が関連づけられる

と仮定しているが、より正確には、「時間軸」というよりも、「事象軸」とでもいうような、現実の時間進行の概念からは抽象化された中立的な様相での、使役的因果関係にも対応するような事象合成のしくみを構想すべきではないかと考える。その場合、He wiped the table clean.のような選択的結果構文においては、一般に活動事象と変化事象が、Rappaport Hovav & Levin (2001)における厳密な意味で同期するが（「テーブルがきれいになっていく」という変化事象は、「彼がテーブルをふく」という行為の開始とともに同時進行する）、He sang himself hoarse.のような非選択的結果構文においては、活動の終結点が結果状態の成立に一致するのみで、彼が歌いはじめた時点から結果状態に至る変化が同時にはじまっているとは解釈しにくい。これは、機能不全解釈の結果句の場合は、測定尺度構築の基準となる変化の始点が、いわば仮想の正常値であり、相補的対立語のようには語彙的に明示しえない状態であることを反映しているのではないと思われる。言い換えれば、仮想された測定尺度上を推移する変化は、終点のみを活動事象と共有するが、事象全体が重複する形での同期は保証されないということになる。

この節では、結果句の選択においては、原則として境界を含む相補的対立を前提とした測定尺度（経路）上の推移が解釈条件となるという選択的結果構文における一般化が、非選択的結果構文へ、さらには、前置詞句を結果句とする結果構文へも拡張して適用できることを主張した。さらに測定尺度（経路）上の推移における境界（上限）は、複合述語形成のプロセスにおいて、本来的に時制を指向する動詞と非時間的な形容詞が、事象解釈において、いわば概念上の折り合いをつけるために導入されるもので、それによって本来非時間的な形容詞であるにもかかわらず、変化事象の読みが喚起されることを論じた。

4. make使役構文と結果構文の半生産性

前節での結果構文の特徴づけを受けて、ここでは結果構文とmake使役構文の関係を検討し、英語における結果構文の構文としての位置づけについて考える。使役動詞makeを用いた使役構文は、しばしば結果構文における使役解釈の原型であり、構文的なモデルであると論じられるが(Boas (2003))、以下では、make使役構文と結果構文のいくつかの相違点を指摘し、結果構文の自律性を主張する。その上で、結果構文がなぜ半生産的な構文なのかという問題を考える。

4. 1 make使役構文

結果構文は、一般に主語である動作主(agent)が、目的語の被動作主(patient)に働きかけて、一定の結果をもたらすという使役解釈を持つ(結果構文の使役解釈については、Goldberg (1995), Rappaport Hovav & Levin (2001)を参照)。Boas (2003:271)は、使用基盤モデルの枠組

みで, push, pull, take, move, make, putといった基本動詞の結果構文的用法 ([NP V NP XP]) が, 結果構文のモデルになっていることを示唆している。¹³ Boasが基本動詞として挙げている動詞のうち, 状態変化の形容詞結果構文に直接対応すると考えられるのは, makeであり, 他の動詞は基本的に位置変化の結果構文 (使役移動構文) にかかわるものである。

しかし, makeの結果構文的用法には, 一般の結果構文とは異なる特徴がある。まず, make結果構文に生じる形容詞は, 境界性の制約を受けない。すなわち想定される使役変化は, 唯一的な測定尺度上の上限への変化である必要はなく, その分, 段階的なものも含めて多様な形容詞が容認され, (41)のように, veryによる程度修飾も可能である ((40) の各例は辞書やインターネットから採取したものである)。

(40) a. The clash made the middle of the car door bent.

b. The rain made the balcony wet.

c. He made the pizza warm.

d. She made him happy.

e. His talk always makes me sleepy.

(41) a. That remark has made me very sad/happy.

b. That drug made me very ill. (Vanden Wyngaerd 2001:74)

また, 形容詞的受身形 (adjectival passive) は, 形容詞との意味の類似にもかかわらず, 通常の結果構文では容認されないことが従来から指摘されているが (Carrier & Randall 1992, Goldberg 1995, Embick 2004参照), make使役構文では, そのような制限は見られない ((43) の各例は辞書やインターネットから採取したものである)。

(42) a. She cooked the roast dry/*burnt/*overdone. (Green 1972:89)

b. The gardener watered the tulips *flattened/*wilting/flat/soggy.
(Carrier & Randall 1992:212)

c. She kicked the door open/*opened. (Goldberg 1995:196)

(43) a. The beard makes him quite distinguished.

b. I couldn't make myself understood in English.

c. He couldn't make himself heard above the cheers.

d. Too much wine makes men drunk.

さらに, (選択的) 結果構文では, 形容詞結果句を省略することが (アスペクト変化や解釈上の含意は別として) 可能であるが, make使役構文では, 「結果句」の削除は容認されない。つまりmakeに関しては, 形容詞が義務的に要請されている。

¹³ 当該箇所でのBoasの議論は, 創造的な非慣用的結果構文 (unconventionalized resultatives) についてであるが, 使用基盤モデルに基づき, 原則的には慣用化された結果構文も含めて, 究極的にはすべての結果構文の起源として上に挙げた基本動詞の用例が想定されている。

(44) *She made me.

(cf. She made me happy/sad/sick/sleepy.)

このようなmakeの結果構文の使用と通常の結果構文における結果句の選択に関する違いは、何に起因するのだろうか。

ここで示唆を与えてくれるのは、Vanden Wyngaerd (2001)による、推移にかかわる形容詞の2分法である。彼は、Barbiers (1995)の示唆に基づき、否定の文脈における形容詞の解釈の違いから、形容詞が表す2種類の推移のタイプ、すなわち「価値推移 (value transition)」と「特性推移 (property transition)」を区別している。

(45) のペアにおいて、(45a)の形容詞emptyは否定されることによって、単一の測定尺度上でemptyが指示する上限以外のあらゆる値を相補的にとりうるのに対し、(45b)の形容詞happyの場合は、当該の測定尺度上のすべての値が否定され、原理的にはそれ以外のありとあらゆる特性が成立しうる。すなわち、前者では、the bottleの状態は、あくまでemptiness (あるいはfullness) に関する測定尺度上の任意の値に限定されるが、後者では、Theoの状態は、happinessの測定尺度以外に属するものであれば、潜在的にはどんな状態でもありうることになる。

(45) a. The bottle is not empty.

b. Theo is not happy.

このような形容詞の特性に基づく対比を (結果構文のような) 推移の文脈に適用すると、前者のタイプの形容詞は、(46a)のような特定の測定尺度上の任意の値 α から極限值 1 への変化 (「価値推移」) であるのに対して、後者のタイプの形容詞では、(49b)のような特定の測定尺度とは無関係に、任意の状態Aが成立しない状態から成立する状態への変化 (「特性推移」) となる。

(46) a. 0 ——— α ——— 1 (価値推移)

b. $\sim A \rightarrow A$ (特性推移)

(47)の具体例に基づいて考えると、(46a)の価値推移では、変化の起こる前のthe bottleの状態は、emptiness/fullnessに関する測定尺度上の任意の値であるのに対し、(46b)の特性推移では、原理的にTheoは、happinessに関する測定尺度以外の、無限に考えうる状態のいずれでもありうる (e.g., Theo was {sad/mad/angry/lonely/gloomy/drunk/desperate/helpless/embarrassed}). これは推移の生じる測定尺度はいっさい制限されていないということである。

(47) a. The bottle became empty.

b. Theo became happy.

Vanden Wyngaerd (2001:73-74)は、結果構文で容認される形容詞は、「価値推移」の解釈を

¹⁴前節で考察した反意語に関する形容詞の分類では、中間領域を含む記述的反意語のグループ (e.g., deep/shallow, fast/slow, long/short) も、「価値推移」の特性を示すので、「価値推移」に基づくVanden Wyngaerdによる可能な結果句の特徴づけは、厳密にはより広い範囲の形容詞を包含することになるであろう。

持ちうるものに限られると指摘している。¹⁴ 一方、「特性推移」を具現化するのが、make使役構文であると述べている。つまり、make使役構文では、変化の生じる前の状態は、結果状態を表す形容詞にかかわる測定尺度に属さなければ、潜在的にはどのような状態でもありうることになる。例えば、She made me happy.という使役事象が成り立つ場合に、変化の起こる前の状態は、happy以外のあらゆる状態 (sad, mad, silly, lonely, upset, etc.) が潜在的には可能となる。

make使役構文に特徴的な「特性推移」を表す形容詞は、前節で見た「評価的反意語」に相当するものと考えられる。これらの形容詞は、変化の道筋を特定する自律的な測定尺度を持ちえないのである。¹⁵

ここでは、Vanden Wyngaerdの観察をもとに、make使役構文における変化事象と通常の結果構文における変化事象は、根本的に異なる事象タイプであると提案する。直感的には、結果構文の場合は、変化事象における推移の経路 (測定尺度) が文の意味解釈において特定されうるが、make使役構文の場合は、そのような経路は言語的解釈の範囲外であり、変化プロセスが文法的に特定されることはない。つまり、結果構文が描写するのは、特定の行為・活動に基づく結果状態に至る特定の「変化プロセス」であるのに対して、make使役構文が描写の対象とするのは、不特定の行為・活動による特定の「結果状態の成立」だけからなる「最小限の変化事象」である。

この違いをより厳密に形式化して考えるには、Rothstein (2004:155)による「到達事象 (achievement)」と「達成事象 (accomplishment)」の特徴づけが示唆的である。

- (48) a. Accomplishments ... are changes which take time. Since a change from $\neg\phi$ to ϕ is near-instantaneous, a change which takes time must be a change from ψ to ϕ , where ψ is ... a state which entails $\neg\phi$. Accomplishments are not atomic..., since they can be broken down into a series of smaller changes which gradually get you from ψ to ϕ . (「達成事象」は、一定の時間幅を持つ変化である。 $\neg\phi$ to ϕ の変化はほとんど瞬時的であるので、時間のかかる変化は、 ψ が $\neg\phi$ を含意するような状態 ψ から状態 ϕ への変化でなければならない。「達成事象」は、漸次的に状態 ψ から状態 ϕ へ進行するより小さな変化に分割できるので、「原子的」な事象ではない.)
- b. Achievements are minimal changes from $\neg\phi$ to ϕ , which therefore take no time ... [they are] "atomic" in the sense that they cannot be broken down into any smaller changes. (「到達事象」は、最短の変化 $\neg\phi$ to ϕ を表す事象であり、それゆえに事象としての時間の幅を持たない…それ以上より小さな変化に分割できないという点で「原子的」な事象である.)

¹⁵ make使役構文では、もちろん「相補的対立語」や「記述的反意語」も容認される。それに加えて「評価的反意語」も可能となる点が、結果構文との相違である。

Rothsteinによる「達成事象」と「到達事象」の本質的な区別は、前者が、変化に至る一定のプロセスを含むがゆえに、細部への分割可能な内部構造を持つ非原子的な事象であるのに対し、後者は、変化の瞬時的な成立それ自体のみを描写する、それ以上分割不可能な最小限の原子的事象であるという点にある。

通常の結果構文では、それぞれの動詞が被動作主 (patient) に対して特定の様態 (manner) で働きかけを持ち、それに応じて生じる変化のプロセスが描写されている。それに対し、(44) で見たように、使役動詞makeが「結果句」を義務的に必要とするのは、makeの軽動詞的性質に起因して様態 (manner) の指定が事実上欠如していることと関連している (Hale & Keyser (2002) 3章参照)。行為の具体的な様態が未指定なまま、結果を含む最小限の使役事象であることが指定されているため、結果の具体的描写なしには自律した動詞句としての事象解釈が得られないのだと考えられる。つまり、様態指定が欠如していることにより、make使役構文の解釈においては、結果に至る変化の推移がどのようなプロセスをたどるかが、不問とされているのである。

make使役構文とは異なり、通常の結果構文に共通する特性は、前節で提案した「唯一的な測定尺度 (経路) 上の推移」が想定されるという解釈上の要請に対応する。一方、make使役構文によって描写されるのは、唯一的な測定尺度 (経路) が必ずしも想定されない、最小限の使役的变化事象である。

また、状態変化を表すmake使役構文と並んで、使役的位置変化を表す基本動詞の1つputの使役移動構文にも同様の特性が見られる。先に見たように、前置詞句を伴う結果構文では位置移動と状態移動の違いにかかわらず、境界横断的な経路解釈を持つ前置詞句のみが容認されるが、putを主動詞とする使役移動構文では、動的な前置詞句に加えて、境界横断的な解釈を持たない静的な前置詞句も、最終的な着点を表す「結果句」として機能する。動詞putもまた、makeと同様に最小限の様態指定しか持たない軽動詞の1つと考えられる。

(49) a. Howard put the toy in the box.

(cf. Howard put the ball into the box.)

b. She put the tray of little things on the table.

(cf. She put the tray of little things onto the table.)

この例が示すのは、状態変化のみならず、位置変化を表す使役移動構文においても、動詞の選択に応じて境界性の制約が課される構文とそうでない構文があるということである。

さらに、関連する事実として、[NP V [scNP XP]]という構造において、[scNP XP]が結果事象の解釈を持つ場合に、必ずしも使役的解釈が要請されないことにも注意する必要がある。

(50) a. She winked us past. (Rappaport Hovav & Levin 2001:769)

b. ...lost children who have finally cried themselves quiet. (Levin(n.d.):9)

- c. Reluctant to let him go, the audience clapped the singer off the stage.
- d. At the opening of the new Parliament building, the crowd cheered the huge gates open.
- e. Every night the neighbor's dog barks me asleep. (c-e, Rothstein 2004:131)
- f. He opened his mouth to reply and another gust of wind struck them, this one so hard it made them both wince their eyes shut.(Stephen King, *Insomnia*)

これらの事例においては、活動事象と変化事象は、明白な使役関係なしに同時に進行するものと解釈することが可能である。例えば、(50b)の例では、子どもが泣くことと、おとなしくなることは、「泣いたせいでおとなしくなる」と必ずしも因果的に解釈されるのではなく、「子どもの泣く行為の終結時点で、静かになるという状態も同時に達成される」という同時進行の解釈ができる。同様に、(50e)の例は、「隣家の犬が吠えるのを聞きながら眠りにつく」というのは、犬の声のおかげで眠れるということではなく、単に「寝るときにはいつも犬が吠えている」という同時進行の出来事を表しているにすぎない。このような事実は、英語における小節構造の埋め込みに基づく複合述語形成においては、「使役」と「同時進行」という二通りの解釈上の選択肢があるものと考えられる(Wunderlich (1997), Rappaport Hovav & Levin (2001), Rothstein (2004) 参照)。

以上のように、make使役構文には、通常の結果構文には不可欠な「唯一的な測定尺度（経路）上の推移」に相当する変化プロセスが含まれておらず、また、通常の結果構文では1つの選択肢にすぎない使役的解釈が、make使役構文では義務的であるという違いもあることを考慮すると、結果構文の歴史的な起源の問題は別としても、現代英語においては、make使役構文からは独立したレベルでの解釈のしくみ、抽象的なモデルとしての「結果構文」が存在すると考えるべきであろう。

なお、make使役構文において可能な分詞形の形容詞的受身が、通常の結果構文では不可能になる理由は、現時点では十分に明らかにすることはできないが、純粋な形容詞と異なり、形容詞的受身は、動詞本来の自律的な事象プロセスを内在化している（関連する統語分析として Embick (2004) を参照）と考えると、複合述語形成において主動詞の表す活動事象との整合性が障害となるのではないかとと思われる。一方、make使役構文においては、make自体は様態指定の欠如により自律的な変化プロセスを持たないので、形容詞的受身が持つ内在的な事象プロセスをそのまま複合事象としての解釈に転用することが可能になるのではないかと考えられる。

4. 2 結果構文の半生産性と創造性

Goldberg (1995:217)は、Marantz (1992)による英語のWay構文をフェイク目的語結果構文の一種と位置づける議論を批判して、(16-17)の対比を示し、言語事実としては、Way構文が

動詞の選択に関して非常に生産的な構文であるのに対して、結果構文の生産性は非常に限定的であることを述べている。¹⁶

- (51) a. He bludgeoned his way through...
 b. They mauled their way up the middle of the field.
 c. They snorted and injected their way to oblivion... (Goldberg 1995:217)
- (52) a. *He bludgeoned himself crazy.
 b. *He mauled himself silly.
 c. *He snorted and injected himself dead. (Goldberg 1995:217)

また、Boas (2003)は、コーパス・データを用いた結果構文の広範な調査に基づいて、従来の結果構文研究が非常に限定的な数少ない事例にのみ基づいていることを指摘するとともに、コーパス・データの調査においても、動詞と結果句とのあいだに観察される選択的共起関係は、主要なものは慣用的に固定化されていて、結果構文の生産性自体は従来考えられてきた以上に非常に低いと論じている。¹⁷

さらに、結果構文の半生産性に関連して、ほぼ同等の意味を持つと思われる形容詞と前置詞句のあいだでも、互換性がほとんどないことがVerspoor (1997)によっても指摘されており、Boasは、これらの事例における形容詞と前置詞句の分布に関する規則性を見いだすことは事実上不可能であり、個々の動詞に関して結果句の範疇のタイプまでを指定されなければならないと主張している。¹⁸

- (53) a. He laughed himself to death.
 b. *He laughed himself dead.
 c. He laughed himself to sleep.
 d. *He laughed himself sleepy/asleep.
 e. He laughed himself out of job.
 f. *He laughed himself jobless/unemployed.
 g. He danced himself to fame.
 h. *He danced himself famous. (Verspoor 1997:119)

Boas (2003:271)は、使用基盤モデルに基づき、push, pull, take, move, make, putの基本動詞が、非慣用的結果構文 (unconventionalized resultatives)、すなわち、その場限りの新奇な結果構文の創造におけるモデルとして機能すると論じている。具体的には、自動詞sneezeが

¹⁶関連する議論としてJackendoff (1997)も参照。

¹⁷ただし、後でも触れるように、Boasの調査は、従来の研究で挙げられている代表的な結果句（形容詞と前置詞句）と動詞のコーパス上の検索に基づくものであり、新奇な使用事例については十分な分析がなされているわけではない点は注意が必要である。

¹⁸「経済性」の原理に基づいて形容詞と前置詞句の結果句の使い分けにおける規則性を捉えようとする試みとして、都築(2004)がある。

結果構文において使用される(54)の例について、基本動詞pushの用法をもとに、より具体的な行為を表す動詞blowの結果構文での用法が、「口（鼻）からの空気の放出」という意味的共通性を動機づけとして、動詞sneezeの結果構文での新奇な使用例のモデルとなっていると分析されている。

(54) Frank sneezed the napkin off the table. [sneeze←blow←push]

Boasが具体的に論じている結果構文の新奇な事例は、このsneezeの例のみであるが、ここでは、他の創発的と考えられるいくつかの事例について、同様の基本動詞を設定する並行的な分析が可能かどうかを検証してみよう。

- (55) a. She *laughed* tomato soup up her nose. [← ?suck]
 b. He *kissed* these questions from her lips. [← ?remove]
 c. You can *bite* the pain into the belt. [← ?push/transfer]
 d. He *frightened* the hiccups out of her. [← ?take (away from)/get/force]
 e. The dog *barked* me awake. [← ?make/wake]
 f. The teacher *stared* them silent. [← ?make]

[]内は、言い換えの可能性も含めて、モデルとなりうる動詞を候補として示したものであるが、インフォーマントの判断では、直感的にこれらの動詞を特定することは必ずしも容易ではなく、複数のインフォーマント間でも動詞の選択に関して判断が異なる場合もある。

(55e-f)のように、形容詞結果句が状態変化を表す場合には、概ね動詞makeをモデルと想定することができるようではあるが、上述したように結果構文とmake使役構文には、解釈上根本的な相違もあり、形容詞が結果句として生じるすべての結果構文のモデルとして、make使役構文を想定する根拠は必ずしも明らかとはいえない。さらにいえば、make使役構文を結果構文の直接のモデルとすることは、逆になぜ結果構文には自由な生産性がないのか、という問題に答えることを難しくするように思われる。明示的なモデルがあるとすれば、それが生産的に利用されないのは、かえって不自然ではないだろうか。

一方、(55a-d)のように、前置詞句結果句が位置変化を表す場合には、何が基本動詞かということも含めて、直接モデルとなる動詞（の構文使用例）を特定することはやはり簡単ではない。詳述はされていないが、Boasの分析においても、1つの新奇な結果構文の事例に対して、特定の基本動詞の結果構文的用法が単純に直接対応する形でモデルとして設定されるわけではないだろう。¹⁹

したがって、ここでは、結果構文の背後には、make使役構文とは独立に、一定の抽象性を持った「構文」を設定する必要があると考える。ただし、本稿で考える「構文」は、構文文法

¹⁹Boasは、「複合的継承階層 (multiple inheritance hierarchy)」に基づくより複合的な創発プロセスに基づく説明を示唆している (Boas 2003:271)。

で提案されている固定された所与の文法レパートリーとしての構文ではなく、特定の構造に基づいた抽象的な解釈の枠組みとでもいうべきものである。結果構文については、「唯一的な測定尺度（経路）上における境界（上限）への推移」が解釈上成立することが、最終的な構文の認可条件として要請されることになる。

すでに述べたように、結果構文は、いくつかの共通性を持つWay構文に比べて、生産性が低いのは事実である。²⁰ その理由として考えられるのは、Way構文のような指定語彙がない上に、前述したような抽象度の高い解釈条件が課されることに加え、比較的少数の特定前置詞の選択により位置変化が明示的に示される前置詞句だけではなく（こちらは結果構文としては生産的である）、より母体が大きく、また直接的には変化を表現できない形容詞の選択がかかわっていることである。つまり、結果構文は、構成する語彙の選択が原則自由でありながらも、文全体では「唯一的な測定尺度上の境界への推移」という抽象度の高い解釈条件が要請されるという点で、言語使用者にとって難易度の高い構文であるといえる。しかし、ここまで論じてきたように、生産性がある程度限定されていることは、必ずしも構文として一般化される特性を持たないことにはならないし、その自立性を否定する根拠ともならないと思われる。

5. おわりに — 結果構文の創発性と一般化

この論文では、結果句の境界性に関する一般化を、「唯一的な測定尺度（経路）上の境界（上限）への推移」という形で提示し、これが制約となって、結果句の選択を左右することを論じてきた。さらに、この解釈条件は、小節が動詞補部に埋め込まれた構造に基づく複合述語形成 (complex predicate formation) に伴い、2つの述語を時間軸上で統合する際に概念上要請される境界性に由来する派生的な解釈可能性であること提案した。さらに、make使役構文と結果構文の相違点を検証し、本質的に前者は最小限の変化を表す到達事象であるのに対し、後者は変化に至るプロセスを内包した達成事象であると分析できることから、結果構文の構文としての独立性を主張した。また、結果構文の示す半生産性は、「構文」としての抽象性に由来するものであることを示唆した。

紙幅の都合で十分に検討することはできなかったが、使用基盤モデルに基づくBoas (2003)の分析は、結果構文の特性を個別動詞の用法の問題へと還元することで、かえって英語における結果構文の全体像、可能な一般化を見えにくくしているきらいがある（同趣旨の指摘としてGoldberg & Jackendoff (2004:562)を参照）。構文として一般化を求めることを放棄するような彼の分析では、たとえ半生産的であれ、なぜ英語には、他の言語では必ずしも一般的ではな

²⁰ フェイク再帰形目的語結果構文は、動詞の選択に関して自由度が高いが、それは目的語の選択肢が固定されていることによるWay構文との高い類似性 (Marantz (1992) 参照) に加え、結果句に関しても、比喩的な誇張の読みを持つ機能不全解釈として、形容詞、および前置詞句のレパートリーがある程度固定されていることに起因すると考えられる。

い「結果構文」というものが少なからず観察されるのか、という発展的な問いへ進む道が閉ざされているように思われる。究極的には力点の置き方の違いなのかもしれないが、本稿における結果構文に関する一般化の試みは、Boasとは逆の視点から、一定の抽象性を持った「結果構文」の創発的なモデルを提案することを目指したものである。

Boasが個別動詞の使用における慣用化をことのほか重視しているのは、創造的な結果構文の使用例を過小評価していることの反映であるようにも思われる。コーパスを用いて収集された6,000件を超える結果構文の事例 (Boas (2003:1)) を分析対象としているにもかかわらず、彼の研究で直接とりあげられている新奇な事例は、本来的にそれらの生起がまれであることを差し引いても、ごく少数にすぎない。これはこれまでの先行研究で与えられた事例における結果句と動詞を検索語とするコーパス調査を基本としているためであると思われる。つまり、新奇で創発的な結果構文の事例の発見は、本質的にコーパス調査になじまないからである。むしろ、英語の結果構文における言語使用の創造性に着目すれば、構文に固有の一般性を持った (抽象レベルの) 創発プロセスを解明する方向で分析を試みる意義があると考えられる。

参 考 文 献

- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Cruse, D.A. (1976) "Three Classes of Antonyms in English," *Lingua* 38, 281-292.
- Cruse, Alan (2000) *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*, Oxford University Press, Oxford.
- Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.
- Dowty, David (1991) "Thematic Proto-roles and Argument Selection," *Language* 67, 547-619.
- Embick, David (2004) "On the Structure of Resultative Participles in English," *Linguistic Inquiry* 35, 355-392.
- Gnutzmann, Claus (1975) "Some Aspects of Grading," *English Studies* 56, 421-433.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele and Ray Jackendoff (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions," *Language* 80, 532-568.

- Hale, Ken and Samuel J. Keyser (2003) *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge.
- Harley, H. and R. Folli (2004) "Walzing Matilda around and around: On the Licensing of Directed-motion Resultatives," ms.
- Jackendoff, Ray (1996) "Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English," *NLLT* 14, 305-354.
- Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press, Cambridge.
- Jackendoff, Ray (1997) "Twistin' the Night Away," *Language* 73, 534-559.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally (to appear) "Scale Structure and the Semantic Typology of Gradable Predicates," *Language*.
- Krifka, Manfred (1992) "Thematic Relations as Links between Nominal Reference and Temporal Constitution," *Lexical Matters*, ed. by Ivan A. Sag and Anna Szabolcsi, 29-54, CSLI Publications, Stanford.
- Krifka, Manfred (1998) "The Origin of Telicity," *Events and Grammar*, ed. by S. Rothstein, 197-235, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Langacker, Ronald W. (2000) "A Dynamic Usage-Based Model," *Usage-Based Models of Language*, ed. by S. Kemmer and M. Barlow, 1-63, CSLI Publications, Stanford.
- Levin, Beth (n.d.) "Aspect, Lexical Semantic Representation, and Argument Expression," ms. Stanford University.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (to appear) "The Semantic Determinants of Argument Expression: A View from the English Resultative Construction," *The Syntax of Time*, MIT Press, Cambridge.
- Marantz, Alec P.(1992) "The Way-construction and the Semantics of Direct Arguments in English: A Reply to Jackendoff," *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*, ed. by T. Stowell and E. Wehrli, 179-188, Academic Press, New York.
- Napoli, D. J. (1999) "Resultatives," *Concise Encyclopedia of Grammatical Theories*, ed.

- by K. Brown and J. Miller, 324-329, Elsevier, Amsterdam.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) "Building Verb Meanings," *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, ed. by M. Butt and W. Geuder, 97-134, CSLI Publications, Stanford.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language* 77, 766-797.
- Rapoport, T.R. (1999) "Structure, Aspect, and the Predicate," *Language* 75, 653-677.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events*, Blackwell, Oxford.
- Sapir, Edward (1944) "On Grading: A Study in Semantics," *Philosophy of Science* 2, 93-116.
- Simpson, Jane (1983) "Resultatives," *Papers in Lexical-Functional Grammar*, ed. by L. Levin, M. Rappaport, and A. Zaenen, 143-157, Indiana University Linguistics Club, Bloomington.
- Snyder, William (2001) "On the Nature of Syntactic Variation: Evidence from Complex Predicates and Complex Word-formation," *Language* 77, 324-342.
- Suzuki, Toru (2003) "Constraining Resultatives: A Significant Transition on a Unique Scale," *Explorations in English Linguistics* 18, 39-78.
- Suzuki, Toru (2004) "Complementary Opposition in Resultatives," 『付加詞の統語論とLF表示』平成13年度～15年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書, 研究代表者 鈴木亨, 33-60.
- 都築雅子(2004)「行為連鎖と構文II：結果構文」, 『認知文法論II』中村芳久（編）, 89-135, 大修館書店, 東京.
- Vanden Wyngaerd, Guido (2001) "Measuring Events," *Language* 77, 61-90.
- Verspoor, Cornelia Maria (1997) *Contextually-dependent Lexical Semantics*, University of Edinburgh dissertation.
- Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
- Wechsler, Stephen (1997) "Resultatives Predicates and Control," *Proceedings of the 1997 Texas Linguistics Society Conference, The Syntax and Semantics of Predication*, eds, R.C. Blight and M.J. Moosally, 307-322, University of Texas at Austin (Linguistics Department), Austin.
- Wechsler, Stephen (2001) "An Analysis of English Resultatives under the Event-argument Homomorphism Model of Telicity," *Proceedings of the 3rd*

- Workshop on Text Structure*, University of Texas, Austin, October 13-15, 2000.
- Wunderlich, Dieter (1997) "Argument Extension by Lexical Adjunction," *Journal of Semantics* 14, 95-142.

Transition in Resultatives and the Origin of Boundedness

SUZUKI Toru

The two decades of research in several different veins following the ‘discovery’ of the resultative constructions in English by Simpson (1983) have finally seen an apparently converging generalization that secondary predicates in the constructions necessarily express a bounded event of transition (cf. Goldberg 1995, Wechsler 2001, Vanden Wyngaerd 2001 among others). However this generalization still seems to lack its own theoretical justification, namely, why the constructions in the first place require the bounded interpretation in their secondary predicates.

This article explores the nature of the boundedness constraint in resultatives. We propose that the relevant constraint in the choice of result phrases corresponds to an interpretive characterization that an event of change in resultatives expresses a unique transition on scale/path with a boundary. It is further argued that the boundary reading itself originates in the process of complex predicate formation between the main verb and the secondary predicate in its structural complement.

In addition, we also deal with the question of why the resultative constructions are only ‘semi-productive’ compared with seemingly related constructions such as the *way-* construction (cf. Marantz 1992, Goldberg 1995, Jackendoff 1997). Our contrastive scrutiny of resultatives and *make*-causatives, which are often regarded as the prototype model of the resultative constructions, suggests that the two types of constructions should be independently analyzed with respect to the nature of changing events: the resultative constructions are events of ‘accomplishments’ which involve a process of changing event on a unique scale while *make*-causatives are events of ‘achievements’ which are minimally composed of an atomic change (cf. Rothstein 2004). Accordingly, we argue that the resultative constructions have their own distinct grammatical status, which is the key to understanding their semi-productivity in actual use.